

第18回

## 近世の朝鮮王朝

監修・講師  
 六反田 豊

### 学習のねらい

14世紀末、朝鮮半島では李成桂が高麗を滅ぼして朝鮮王朝を建国した。この王朝は国を治めるための教えとして儒教、中でも特に朱子学を重視し、学問や独自の文化を発展させた。16世紀末には豊臣秀吉の軍事侵攻で大きな被害を受けたが、一時断絶していた日本との国交が17世紀初めに回復すると、以後270年近くの間、平和な関係を維持した。この期間中、朝鮮国王の使節である通信使が12回、日本に派遣された。近世の朝鮮王朝の歴史を儒教と通信使に焦点を当てながら学ぶ。

- ・ <朝鮮王朝の建国>
- ・ 李成桂 倭寇 朱子学
- ・ <儒教文化の担い手としての士族・両班>
- ・ 科挙 士族 両班 世宗 訓民正音
- ・ <朝鮮通信使と日本>
- ・ 豊臣秀吉 壬辰・丁酉倭乱 徳川家康 通信使 倭館

### ■ ■ 朝鮮王朝の建国 ■ ■

13世紀半ば以降、高麗はモンゴル帝国の元に服属していた。しかし14世紀後半に中国で元から明へ王朝が交代する中、朝鮮半島でも政治的変動が生じ、1392年、李成桂が高麗を滅ぼして新しい王朝を建国した。この王朝は国号を「朝鮮」と定め、都を開城から漢陽（現在のソウル）に移して漢城と改称した。李成桂はもともと朝鮮半島東北地方出身の武人で、高麗末期にさかんに朝鮮半島を襲った倭寇の撃退で功績を立てた人物である。彼は、国を治めるための教えとして儒教を重んじ、中でも特に朱子学を国家公認の唯一の学問に定め、都や各地に学校を建てて普及に努めた。

### ■■ 儒教文化の担い手としての士族・両班 ■■

朝鮮王朝の時代、国王を補佐して国政を運営する文武の官僚は、おもに<sup>かきよ</sup>科擧により選抜された。科擧では、朱子学の知識・教養が問われた。科擧を受験して官僚となったのは、おもに地方の有力者かつ知識人層である<sup>しぞく</sup>士族だったので、やがて士族は、もともと文武の官僚を指す言葉だった<sup>ヤンバン</sup>両班の名でよばれるようにもなった。彼らは朱子学をさかんにし、独自の文化を発展させた。また 15 世紀半ばの<sup>せいそう</sup>世宗（在位 1418～50）は、優秀な若手官僚を学問研究に専念させたり、民族独自の文字である<sup>くんみんせいおん</sup>ハングル（当時は「訓民正音」とよばれた）をつくったりするなど、文化事業を進めた。

### ■■ 朝鮮通信使と日本 ■■

朝鮮王朝建国後、日本との間にはおおむね平和な関係が維持されていた。ところが 1592 年、<sup>とよとみひでよし</sup>豊臣秀吉が明征服のため大軍を朝鮮に派遣し、こうして始まった<sup>じんしん ていゆう わらん ぶんろく けいちよう</sup>壬辰・丁酉倭乱（文禄・慶長の役）によって朝鮮は甚大な被害を受け、多くの人々が捕虜として日本に連れ去られた。17 世紀に入り、<sup>とくがわいえやす</sup>徳川家康が実権を握って江戸に幕府を開くと、幕府は戦争によって断絶した朝鮮との国交回復を望み、朝鮮もこれに応じて国王の使節を日本に派遣した。のちにこれが<sup>つうしんし</sup>通信使とよばれるようになり、以後 19 世紀初めまでに 12 回の通信使が来日し、朝鮮国王の国書を将軍に届けた。通信使は、先進的な文化や学問の伝達者として、また珍しい異国の風俗を見せてくれる者として、江戸へ向かう途中の日本各地で歓迎を受けた。

#### 考えてみよう 調べてみよう

- 中国では歴代の王朝において<sup>じゆきよう</sup>儒教がどのように取り扱われてきたかを整理してみよう。
- 世界各地で使われている文字とその由来について調べてみよう。